

九条の樹 57

2015年9月



東久留米「九条の会」ニュース

発行：東久留米「九条の会」

代表者 古田足日・連絡先 鈴木Tel 042-473-9489

<http://members3.jcom.home.ne.jp/higashikurume9/>

メール：higashikurume9@jcom.home.ne.jp

日本国憲法 第9条

- ①日本国民は、正義と秩序を基調とする国際平和を誠実に希求し、国権の発動たる戦争と、武力による威嚇又は武力の行使は、国際紛争を解決する手段としては、永久にこれを放棄する。
- ②前項の目的を達するため、陸海空軍その他の戦力は、これを保持しない。国の交戦権は、これを認めない。

子どもたちと若者たちの未来のために、戦争法案を廃案に追い込もう

佐藤 学 (学習院大学教授・安全保障関連法案に反対する学者の会発起人 学園町2丁目在住)

8月30日、国会前は数えきれない人々(主催者発表は12万人、しかし、どう見ても20万人は超えていたと思う)で埋め尽くされた。新しい歴史の1ページが、この闘いによって開かれた。そう誰もが確信した大集会であった。

私が、「安全保障関連法案に反対する学者の会」の立ち上げを決断したのは、6月4日、憲法調査会において3人の憲法学者が違憲表明を行った時である。「今だ!」と、ただちに行動を開始した。この時、私は海外出張で香港にいたのだが、ホテルの外では「天安門事件追悼集会」が12万人の市民と学生によって行われていた。

ただちにツイッターで驚異的な拡散力をもつ内田樹さんと上野千鶴子さんに相談し、11年間も会員をつとめ、6年間は第一部(人文社会科学) 副部長と部長をつとめ

た日本学術会議で親交をもった各分野の第一線の学者に発起人と呼びかけ人を依頼した。その中には益川敏英さん(ノーベル賞受賞者)、広渡清吾さん(日本学術会議前会長)、樋口陽一さんをはじめとする日本学士院の先生方が含まれていた。

今から考えると信じられないことだが、当時、自民党と公明党は6月20日までに衆議院で採決することを予定していたのだ。憲法学者の「違憲発言」と、私たち学者の会の6月15日の記者会見と活動、そしてSEALDsの学生たちの闘いが、国会の外の力関係を逆転させた。さらに率直に告白すると、学者の会を立ち上げたときは、私自身もSEALDsの存在を知らなかった。学者の会が立ち上がると、すぐにSEALDsから協力の依頼を受け、6月末から

協同の闘いが始まった。

学者の会で苦慮したのは、報道メディアへの働きかけである。まだ一般には十分に知られていないが、安倍政権によって報道メディアはほぼ完全に政府の統制下に置かれていた。たとえば「皆さまのNHK」が「安倍さまのNHK」(上野千鶴子の言葉)へと変貌してしまっていた。他のテレビ局、新聞も同様である。この壁を突破するのが、学者の会の大きな使命だと思った。つまり、学者の会とSEALDsの行動は、報道メディアにとって取り上げることが可能な行動なのだ。しかし、通常では、この壁は崩せない。

そこで考案したのが、「学者150人記者会見」(7月20日)、「学生と学者の共同行動」(7月31日)、「100大学有志共同行動」(8月26日)「学者と日弁連の共同

行動」(8月26日)などである。これらは映像的にもインパクトがあり、これまでのどの記者会見よりも報道する側の魅力があり、そして行動する人々の自主性と創造性を呼び起こす。実際、あれほどかたくなに報道から逃げていたNHKテレビが、「学者150人記者会見」を午後6時、9時、11時のニュースで放映した。この報道によって、報道メディアへの統制の一角が決壊した。それに続くSEALDsとの共同は、さらに有力であった。今や、学生と学者との共同行動は、戦争法案反対の運動の中心的推進力の一つとなっている。これらの闘いは、市民の闘いに希望を与え、市民の闘いを支援することとなった。

これらの闘いによって、国会の外の力関係は完全に逆転した。憲法学者の9割以上が「違憲」を表明し、学者の1万3千人以上が行動に立ち上がり、SEALDsの国会前行動には毎回1万人近くが参加し、SEALDsの組織は全国化し、全国115大学(8月30日現在)で有志の会が活動を開始し、国民の6割が戦争法案に反対し(賛成は2割程度)、国民の8割が今国会で通すべきではないという世論を形成した。

これは歴史的事件である。8月30日の国会前の航空写真を見てほしい。60年安保の時の国会前の車道も広場も現在の半分以下だった。明らかに、60年安保の運動の規模を超えている。私は70年安保の27万人集会・デモにおいて学生として参加したが、その規模はもちろん超えている。しかも、もっと大きな違いがある。60年安保、70年安保の運動は、政党と労働組合が組織した運動であった。今回は違う。立ち上がったのは市民であり、学生であり、学者であり、ママであり、高校生であり、それぞれが個人として自らの意志で参加している。それを政党や組織が支援する闘いに変化している。「立憲主義」という法学

の専門家しか知らなかった言葉が、今や、一般の市民や学生までもが熟知する言葉として定着している。主権者である人々が、主権者としての行動を起こして、民主主義と平和主義のための闘いを行っている。この新しい闘いの力強さと正統性を安倍政権は、まったく認識していなかったようだ。廃案の可能性は広がっている。

教科書採択で見えた市民の力!

100名を超す傍聴者がいる中で、8月11日教育委員会が始まりました。社会科学の教科書が教育委員5人全員の同意で、これまでと同じ東京書籍に決まった瞬間、傍聴席にはほっと安堵の空気が流れました。

戦争法案を廃案にする闘いは、子どもたちと若者たちの未来を守る闘いであり、日本の未来を決定する闘いである。9月6日は、学者の会とSEALDsは新宿伊勢丹前で歩行者天国を埋め尽くす大集会と街宣を行う。各党党首をはじめ、二見公明党元副委員長も、ここで協同のスピーチを行うことになっている。東久留米市の集会に参加できないのは残念だが、同じ時間帯に共に廃案への闘いで連帯したい。

(8月31日)

4年に一度の教科書採択ですが、「もしかししたら、育鵬社の教科書が選ばれるかもしれない」との危機感がありました。それは、国が制度を変え、市長や教育長権限が強化されるようになった中で、東久留米では4月議会で新教育長が誕生し、6月議会で教育大綱が決まり、その中にも教科書採択についての項目が上がっていたなど、心配の要因が複数あったからです。教科書採択に関心を寄せる市民は、学習会で学び、教育委員会への交渉や教育委員への働きかけをしました。教科書選定



委員へも20人をこえる市民が応募しました。その結果、教科書の展示見本本がこれまでの5セットから10セットに倍増し、教育委員会や総合教育会議の傍聴に多くの市民が参加し、資料提供を要求したことから、傍聴の際の資料も配付されるようになり、傍聴の人数の制限はつけられませんでした。

教科書展示は2週間を切る短い期間でしたが、151人の参加がありました。要望書も二つの団体から教育委員会に提出され、採択へ向けての市民からの意見は手紙やはがきで教育委員へ多数送付されました。

このようなたくさんの働きかけがあったこと、そして市民がゆるやかに結びつき、情報を交換しながら、自分たちでできることをやり続けたことが、今回の教科書採択の良い結果につながりました。「市民の力が市政の力」だと強く感じる教科書採択の運動でした。

(西部九条の会・草刈智のぶ)

7・12戦争はいや！ 市民パレード にママたちも参加

7月12日(日)市民集会とパレードが開催されました。

当日は真夏の天気で、気温も30度を超える中、350人も市民の方々が集まりました。市議会からは、会派を超え7名の市議が参加し、また若い方からのメッセージ、たぐさんの方の発言がありました。

市内諸団体や個人の皆様のご努力そして情勢への市民の危機感などがこの結果をもたらしたものと考えます。

参加した若者からは、「私達若者も少しずつですが、戦争



ベビーカーでの参加者

法案阻止の動きを創り出しています。まだ、法案を知らない、気持ちがあっても連帯できていない若者もたくさんいます。が、つながりをつくって自分達の問題であることを広げに広げていきたいと思っています。」

そして、3歳と0歳の子どものお母さんからは、「戦争法案は私の子どもも含め、未来に生きるかけがえのない子どもたちの命と未来を奪うもので、絶対に許すことができません。」「自分の大切な家族、子どもたちが戦場に送られるかもしれない：そんな恐ろしい現実がそこまで迫っている：とても怖くて仕方ないです。」「私も今、行動を起こし戦争法案を廃案にして、国民が守り抜いてきた平和憲法を、子どもたちに残していくためにがんばっていきます。」と発言。40分の訴えの後、パレードへ出発。西口公園へと沿道の人達へ訴えました。

◆西部九条の会



―滝山団地商店街で戦争 法反対の訴えと署名―

7月30日(木)午後5時〜6時滝山団地センター広場で、戦争法案反対の訴えと、チラシ配布、署名を行いました。

西部九条の会の参加者は23名、リレートークは、大野、井口、矢倉、塚田、桐山、星、大山、草刈の8名、署名数は28筆、用意したチラシ約80枚は30分で配布終了となりました。

戦争体験記

教育勅語を暗記して

篠原幸子（東京・豊島区）

戦争という言葉を意識したのは、来年は小学校に行けるのだと、お姉さんになった気分です。張り切っていたときである。

戦争が始まった、真珠湾を攻撃したという大人たちの言葉に、戦争とは何かも知らずに、泣き出したいほどの恐怖を覚えたものだった。

翌年の昭和十七年四月、私は国民学校に入学した。

二年生になると、教育勅語を暗記させられた。覚えた順に名前が張り出されるのだから、全員、我先にと暗記した。

日本は皇紀二千六百年、私たちは天皇陛下の赤子（せきし）だから、お国の為に命を捧げなければなりません、といった趣旨のことを、先生から毎日のよ

うに聞かされていた。私は素直に、鬼畜米英と戦う日本人だから、自分もそうせねば、と心に決めた。

やがて、東京上空にもB29が来襲するようになった。夜、日本軍が照らす何本もの探照灯の光の中に、B29の姿がくつきりと浮かび上がる。「あんなにはつきり見えるのに、どうして撃ち落とさないの」と訊くと、父は、「高いところを飛んでいるから高射砲の弾が届かないんだよ」と教えてくれた。

毎晩のように遠い空のB29から、ちらちらと赤い雪のように焼夷弾がふつてきて、しばらくすると、落ちたあたりの空がぼーっと赤く染まった。

焼夷弾は六角形の鉄の筒で、中に油が入っている。片方にひも状の口火がついていて、地上に落ちるとこぼれた油に火が付く。畑に落ちて突き刺さり、燃え尽きた焼夷弾を友達と見に行き、帰りが遅くなって叱られたこともあった。

近所に爆弾が落ちたときのことだ。その時、私たち家族は、庭に作った防空壕で身を寄せ合っていた。遠くの方からヒューツと聞こえた音がゴーツという大きな音に変わり、頭の上に落ちてくる、と思つた瞬間、ズツシンという大きな衝撃を受け、防空壕が揺れた。目を開けると、くずれた土ぼこりをかぶつた母が、弟や妹の上に覆いかぶさっていた。

この時、百メートルほど離れた商店街に落ちた爆弾は、地面にすり鉢状の大きな穴を開け、周りの家々は爆風でなぎ倒されていた。

直撃を受けた家の人々がどうなったのか、誰かから聞いたはずなのに何も覚えていない。思い出せないままにいます。



《平和を考える本》

『古田足日さんからのバトン』

（ありがとう古田足日さんの会編）



（かもがわ出版）

『おしいれのぼうけん』『宿題ひきうけ株式会社』など、児童文学作家として第一線を走り続けてきた古田氏が亡くなられて、早一年を過ぎた。

また氏は、今、大きな転換期に立っている政治の行方を憂えて、平和を守るためには日本国憲法第九条を守り抜くことが大切と、東久留米九条の会を立ち上げて代表を十年間勤めてこられた。戦時下に一方的な情報によって操られた怖さが骨身に沁みていたからこそ、戦争児童文学の刊行にも心血を注がれた。

本書は、氏が亡くなられたことを悼み、遺志を継いで歩み続けていこうと決心した人々の思いの詰まった随筆集である。

（高田桂子）